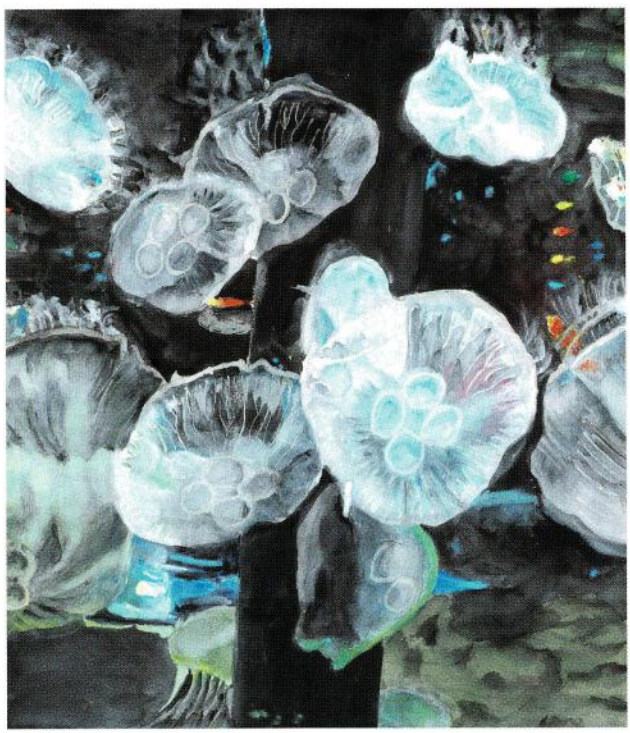
村野次郎創刊

香蘭



2022年（令和4年）5月号

第 99 巻　　第 5 号　　通巻 1097 号

二〇二二年（令和四年）五月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十九巻第五号

香　　蘭

2022年（令和４年）５月号
第99巻　第５号　通巻1097号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（81）……桜井京子…表二
作品
一……2
二……21
三……28
推薦香蘭集……35
香蘭集……36
作品一特選（三月号）……中村（か）・萩尾・本田・松田・宮口・宮原・八木橋・渡辺（君）……14
作品二、三特選（三月号）……江口・関（哲）・竹本・田中・松沢・藤本・武藤・伊藤（久）・川久保・河野・藤田・三神……16
村野次郎への旅（145）……千々和久幸……18
一頁公論（12）中国語への道……大井田啓子……20
七首抄（三月号）……萩尾・後藤・市川・安藤（経）……27
私の読む現代短歌（13）「小説」を残した山崎方代……田中あさひ……40
エッセイ・自由研究　ロシア語に翻訳された「百人一首」……伊藤久美子……42
焦点（三月号）季節を掬う……香山静子……44
作品評（三月号）作品一……長野道子……46
作品二……相川公子……48
作品三……竹本幸子……50
香蘭集……宮口弘美……52
耳言あれこれ（6）……田中あさひ……54
緑地帯……髙畠・脇谷・近藤（美）・阿部（容）……56
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……60
歌会及び会合・会員消息・他……64
編集後記・新宿日記……67
令和四年度　香蘭新人賞作品募集……表三
表紙絵……中村陽子「浮遊」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（81）

たまさかに屋根にのぼれば隣家に咲きて
明るきいちはつの花

『夕あかり』

桜井京子

この歌は歌集『夕あかり』所収、大正七年、村野次郎24歳の折の歌である。いちはつはアヤメ科の多年草で、春になると淡い青紫や白い花を咲かせる。あやめの仲間のうち最も早く咲くので「一初」と呼ばれる。正岡子規の『墨汁一滴』に有名な「いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす」があり、むろん次郎もこれを知っていたであろう。

次郎の歌は、たまたま屋根から隣家のいちはつの花が見えたという、気晴らしに登ったのだろうが、いちはつはどこに咲いていたのであろうか。隣家の庭に咲いていたと見るのが普通だが、或いは屋根の上に咲いていたのかも知れない。昔は茅葺屋根の上にいちはつを植えて屋根を守る役目をさせていたという。

若き日の次郎が屋根の上で風に吹かれながら眺めたいちはつの花は、今も瑞々しく歌集『夕あかり』の中に咲き続けている。

（『夕あかり』35頁に掲載。『村野次郎三百首』には掲載されていない）

四選者の作品

立春　　平塚　千々和　久幸

ワインでも飲んで行こうか立春にさしたる意味がある訳でなし
立春を過ぎて雪くる予報ありさてコーヒーでも沸かして待つか
人間に疲れるような生き方をしてあたら身を腐らせている
待ち人は来る気配なし屑歌をメモし海べりの喫茶店出づ
飲みながらふいっと思う晩飯は何か食わんにゃ　食わんっちゃよか
昼も夜も狂うことなき時計なり戦うことは疾うに止めしに
橙（だいだい）の葉に積む雪を振り払い実をひとつ捥（も）ぐ湯豆腐のため
妻の居ぬ妻の誕生祝にて話題しばしば妻を逸れゆく

東京の雪　　東京　桜井　京子

ほんたうの雪の白さをわれはもう思ひ出せない東京の雪
ひがな一日雪ばかり見て暮らしたるわたしが雪でありしあのころ
晴れわたる冬の青空　祖父母、父母だれもこの世に戻つては来ず
さよならと風がささやく夕つかた表情のない街も好きなり
雪の日の通夜より戻れる連れ合ひに塩を振りかくひと抓（つま）みほど
いづこより来たりていづこへ行くかなど思はぬ川よ　川に雪降る
ひそかなる一片のゆき天と地のあはひに落ちて消えてゆくまで
そのうちに落ちるだらうと見て過ぎし冬の柘榴をまた思ふなり

手術室　　横浜　渡辺　礼比子

手首なるバンドを示しつつ名乗る入院患者となりたるわれは
「左眼窩内腫瘍切除」と記さるる説明書はも夫に預けつ
手術室の自動扉をすべらかに抜けて入り行く車椅子にて
わがいかになるやと興味のなくもなし全身麻酔かけられんとして
麻酔より覚めてしばらく呆たりきわが病室に夕闇迫る
所望せしものと違えどあら美味し夫差し入れの苺大福
病棟の廊の奥なるガラス戸にしかと収まる銀嶺の富士
「順調」と医師は言いたりまだひとつ病理検査の結果待ちにて

北国育ち　　鎌倉　香山　静子

廻し飲みは御法度なればこの年のお屠蘇は棚の飾りものなり
一つ一つ筋子を舌に漬しゐるこれで酒を呑めたらなどと
積雪に戸惑ふ人の多けれどわれには嬉しい北国育ち
月の夜はソリに競ひしあの頃の忘れ難しも年積ねても
時折は枝より落ちる雪の音幼なき頃より聞き慣れし音
わが庭を埋めゆく雪に思ひをり住む者のなき北国の家
あの窓もすつぽり雪に埋もれゐむ少女の頃に海を見し窓
コロナとふ良からぬものに阻まれて今年も帰郷の夢は叶はず

作品一特選

（三月号作品から）

千々和　久幸　選

空っ風　　福岡　中村　かよ子

空っ風わたしの中を吹いた後バケツ蹴飛ばし電線鳴らす
雑踏に紛れて消える君という人の半分わたしは知らない
卒中で倒れた友が無事戻る何かを捨ててきた顔をして
ずんずんと右から左へ闇を裂き最後は胸に消えゆく夜汽車
消えてゆくもののみ麗し裸木に残る氷雨の露ひとかけら
消えてゆく時にも力はいるものか光の中へ雫が飛んだ
石炭の燃える匂いが掻き立てるこの郷愁に訳などなきも

・多角的かつ断定的な見方が奔放自在な世界を現出させた。

落葉の頃　　福岡　萩尾　礼子

柿食えど鐘は鳴らざり「家路」きき子ら帰りゆく夕焼けを背に
一枚だけ残りし枯葉が風にゆれ落ちはせぬぞと意地はるが見ゆ
青杉に別れをつげて散りゆける黄葉が風になりてしまえり
窓を黄に染めてちりゆく銀杏葉が影絵となるを眺めている間
おりおりを癒されきたるいちょう樹の黄金のおち葉を掃きよせている
さみしくばいつでも来よとせんだんの冬の大樹が枝広げいる
わがことと思えば辛し寒ざむと雨に穂を垂る岡の芒は

・美しさの中のわずかな綻びが屈折と陰翳を与えている。

日にち薬　　長崎　本田　民子

雲のハンコ押したるような大小の雲ばかりなり窓に見る雲
焦るまい日にち薬を頼りとし今日より明日を信じて生きん
薄紙が剥がれるように癒えてゆく姑の口癖思うこの頃
膵臓の治療のために健康な胃と腎臓が迷惑したり
脈拍計にふと蘇る幼き日捕えし蟹にかまれた記憶
昨日ひとり今日また一人退院しふたり残りてカーテン閉ざす
スルスルとロープ二本が命綱ゴンドラが来て窓清めゆく

・闘病生活を前向きに捉えれば、周辺はみな歌の素材となる。

もうほっとゐて　　川崎　松田　恭子

食べたきが何もなければ湯を沸かし白湯など飲まんひとりの夜を
儚きをあげつつ気付く最たるは己自身と己が生き様
何気なく口にせしこと責められて八十一歳もうほっとゐて
あれこれを料理しやうと起き出でて銀だら二切煮付けて夕餉

バス停まで歩く途上の白木蓮見上げる枝のかすかふくらむ
私の歌載らない香蘭届きてもよそよそしくて開く気もなし
歌詠むとは何であつたかくり返し自問自答しもう日が暮れる

・短歌で積年の怨みを果たす、その熱いエネルギーを忘れまい。

おかあさん　　東京　宮口弘美

默食に慣れしかわれは会食の近づく程にユーウツ深む
紅葉を見ずにスマホの画面見て急ぐ若きよ秋は短し
冬なれば姿現わす富士山にテンション上がる通勤の朝
オンライン面会の母に「おかあさん」「はあい」と応えるおおきなこえで
マスクして運転する人多くしてひとりの空間何を恐れる
ひたひたと迫る不気味さホラーめきとうとう来たかオミクロン株
午後七時入浴済ませスタンバイ羽生結弦のテレビ観戦

・放胆にしてマイペース、七首目は自分へのご褒美と読んだ。

冬を零せり　　倉敷　宮原迪恵

何げなくカーテンあければ枯庭の椿あかあか冬を零せり
そう言えば山鳩この頃ごぶさたか見上げる空は冬の色なり
思い出はわかちあう人のあればこそ一人おもえば嬉しくもなし
亡き夫のひとり自慢の冬至梅こゆきの中にいま盛りなり
日光を浴びることなく茹でられてホワイトアスパラの白のいとしさ
手すさびに捻子まく夜半のオルゴールこの嫗にもイブなどありき
車窓（まど）に見るわが故郷は仄かにて今日は淋しく雨のふりおり

・老境の一人居の哀感を詠う心の内は、中くらいの幸せか。

「軽井沢の恋」　　埼玉　八木橋洋子

伝説の「軽井沢の恋」旧軽にテニスコートは今も残れり
小説に登場したるレストラン「雲場亭」にてランチしており
去年までずっと三百五十円「ミカド」のソフトの列に加わる
旧軽の「ミカド」のソフト三十円値上げされてもやっぱり旨い
終日を遊び呆けて夕食に横川名物釜飯を買う
風流の分からぬ人と妹が　モミジの落ち葉掃かんとすれば
門の辺に皇帝ダリアが咲いているそれを頼りに友を訪ねる

・堅気（インテリ）の歌人には嫌われそうなベタな歌。そこに親しみと安堵がある。

古井戸　　大月渡辺君子

訪ね来し友が庭辺の菊の花起こしてゆきぬ帰りがてらに
花じまいと根こそぎ切りたるコスモスを選りて活ければ土間のはなやぐ
古井戸を埋めると神主朗々と祝詞の声が穴に吸われる
きらきらと霜に光りて片方の手袋ガードレールにありぬ
冬枯れの芝生はやさし小春日の清春芸術村に今日は来ている
黒子のような研究生がついっときて芸術村の説明をなす
桜咲く春思うべし廃校の庭をとりまく桜の老樹

・見るべきを見、詠うべきを詠って息の乱れがない達者な歌。

作品二、三特選

（三月号作品から）

桜井京子選

〈作品二〉

夫在りし部屋　柏江口絹代

草抜ける庭に目をやり母が言うきれいになって公園のようだ
暴発のような嗚咽を止めてより夫を住まわすわが胸の内に
置かれいし荷物片付きて夫在りし部屋に冬至の日差し射し込む
もう少し生きてみようか寂聴さんが死んでしまって母が残りぬ
夫逝きし夏に青かりし甘夏の実の色付きて冬至を迎う

・四首目、死の順番は知り得ないが、今を生きようとする姿勢が尊い。

一瞬の間　大分関哲行

ブレーキとアクセル間違え皆人が罪人となる一瞬の間よ
昨夕までの柿の実二つ今朝見えず鴉か鵯か秋を終わらす
佐川さん咎めはなしと金もらい今ごろ酒を食らっているか
渋めの茶飲んで始める賀状書き八十一枚気合を入れて
年賀状八十一枚書き終えてペン持つ力のふっと萎えたり

・三首目、森友問題で改竄を指示した佐川氏への処遇に悔しさが滲む。

サバイバルゲーム　千葉竹本幸子

クリスマスの華やぐ街の淋しさよ人と人とはすれ違うのみ
外つ国はマスクせぬ人数多いてサバイバルゲーム見ているような
「お疲れさま」と声かけくれる年下の上司は今日も胃薬を飲む
デパートに賑わい戻るシニアデー元気な年寄りあふるる一日
スーパーで「お金を入れて下さい」と自動支払機にせかされており

・三首目、やさしい上司だが背後には厳しい労働環境が垣間見える。

ビロードの花　取手田中あさひ

水やりの手もとにかかるちさき虹あをき飛蝗とわれが見るのみ
豪邸の瘤だらけの樹がやしなへる姿やさしき実柘榴あまた
わうごんの鯉にいてふの黄葉を見てこしまなこ閉ぢて眠らむ
欲しくとも奪ッてはならぬもの幾つたとへば象牙、妻ある男
寒風に自尊の首を立ててゐる胡蝶すみれのビロードの花

・五首目、胡蝶すみれの孤高に自己を投影して詠い、花の質感が際立つ。

合格発表　さいたま松沢みどり

十二月一日午前九時半に発表される合格番号
八桁の受験番号並ぶなか確かにあったわたしの番号
確かにある本当にある間違いない自分の番号何度も見つめる
合格を課長に告げる部下として責務を果たしたような気持ちで
書き込みやマーカーまみれのテキストを閉じて自分におつかれと言う
部課長と有資格者の同僚においしい焼き鳥おごってもらう

・猛勉強して合格を勝ち取った作者。その喜び溢れる一連である。

まだ二日酔い　　常陸太田　藤本佐知子

片方の洗濯挟みを振り切って夫の冬シャツまだ二日酔い
大戦の開始は八十年前でわが生日はその六日あと
八十の祝いはこれと胃の検査腸の検査の予約をしたり
大切に着て丁寧に仕舞い置きし亡母の服みなわれに小さし
石蕗の咲けばその黄を愛しげに詠みたる友よどうしているか

・三首目、八十年間もお世話になってきた胃と腸をねぎらいたい。

定時に通過　　西東京　武藤昭彦

隔月に人なき実家へ里帰り「水とり象さん」五つ六つ持ち
新しき畳の匂いを深く吸い「畳替えっていいね」と妻は
転調の三小節目をマスターし持ち唄とする「千曲川」なり
算数は苦手だったが吾がひと世役に立ってる九九八十一
うたた寝を破る車内のアナウンス「のぞみ」定時に小田原通過

・五首目、旅の疲れも心地よい新幹線の車中、終点まであと少し。

〈作品三〉

塵に願いを　　千葉　伊藤久美子

風吹けば芒の群れが白魚のような手で呼ぶおいでおいでと
水の上に揺らぐ紅葉は赤々と焦がれるように空を見ている
幼児の手を思わせるもみじ葉が炎の如く見える日もある
冬空に散る流星の正体は光る塵なり　塵に願いを
讃美歌を聴く心地して立ち止まるポインセチアの並ぶ店先

・対象から詩を受感するセンスの良さ、四首目のウイットが良い。

意外に気楽　　川口　川久保百子

俵万智を知らぬ男と暮らしつつ過ぎ行く日々は意外に気楽
行きずりの古本市に見つけたる『病牀六尺』百円で買う
いつもより眉がきれいに引けた日はマスク美人に磨きがかかる
カフェラテの残ったあわを掬いつつ至福の時の終わり見ている

・四首目、何にでも終わりがあることを冷めた目で眺めて秀逸。

光る眼　　鎌倉　河野慎二

グーグルの世界地図には魂を焦がす焚火をする場所がない
ふた色の青の天地を截つ冬の真一文字の水平線は
四六時中俺を見てゐる身のうちの監視塔より光る眼は
一方を海にひらけるこの町で見てをり入り日をひとの別れを

・三首目は強い自意識。奔放な言葉を詩に発酵させたい作者である。

美容院　　横浜　藤田祐恵

鉄製の扉の外は目にしみる非常階段からの青空
ファミレスの窓辺にふわふわ来てすわり小さな後悔ひとりのランチ
黄昏のみなとみらいへ続く道ドラマの彼はここで振られた

・日常から少し離れたところで詩を見つけるのが巧みな作者。

冬の入口　　愛知　三神進

なきにしもあらぬ不安を煽りたてサイレン遠のき帰る虫の音
半ば迄カーテン閉じし窓の先に野が溶けてゆく空の暗さへ
物の怪が佇む態の木々の影バス着く迄の枝の手招き

・日常の向こう側にある不穏な闇の気配を感じ取ろうと感覚を研ぎ澄ます。

村野次郎への旅（145）

大正期の「香蘭」（六）

千々和　久幸

「香蘭」第四巻第三號は昭和一（大正十五）年三月一日に発刊された。巻頭に北原白秋の一家言を載せ総頁64、巻末には白秋作品頒布會の會員募集と香蘭合本豫約募集の広告がついている。白秋の一家言から見ていこう。

歌壇

歌壇とは何か。これはよく考へて見ねばなるまいと思ふ。單に表面的に今日の雑誌新聞等に據る各派若くは箇の短歌作者のみをこの集成者として見ることは謬りであらう。殊に世に謂ふ現代の歌壇なるものは極めて範圍の狭いものであるやうに思はれる。これは藝苑の凡てについても同じことが云へよう。喧囂するのはこの故である。と吾人は須く思を大きく致さねばなるまい。

歌壇意識

現代の歌人は歌壇意識が些か強過ぎる。歌人に最も大切なのは、ただに獨の歌興をのみ思ひ深めることである。この心にさへ終始してゐれば、容易に世の犯すところとならぬ。詩も俳句も文章もそれぞれに道とするところに同じことが云へる。

詩歌の本流

詩歌の本流こそは萬世を貫ぬく。その不易であるべき眞の精神を思はねばなるまい。道は一つであるからである。時により勢に乗ずる流派はある。然しながらその流派が必ずしも本流にあるものか否かは疑はれる。勝てば官軍と云ふことは詩歌の道には無い。眞の精神こそは寧ろ深く深く流れてゐるものにある。詩歌は謙抑の道であるからである。

流派

衡器は均斉を得むが爲めに動く。ひとしく新しい流派は興るべくして興る。であるから前の派にあるものは却つてそれ自身に深く省るべきである。凡そ芸術運動といふものは、一方に行き過ぎ、或いは停滞したるものをただに眞理の一線に引き戻すが爲めの振子作用であるからである。而もまた同じ振幅を以て他方へ乗り越して了ふ。また新しい反抗者が立つ。とは云へ、凡ての流派も行つて誠實であるかぎり、その発生の精神こそは眞に道を道として思ふところに存じてかりそめにも他にあるべきでない。かくして時とともに次第にその振幅を狭め、愈々にその確實性をも増して來る。各流派の競ひ興ることは實に聖代の慶事である。

今月の四項はそのまま現代にも通じる真理が述べられている。芸術運動における流派の意義を「振子作用」と捉えたところは、なるほどと改めて納得した。

この一家言について、編輯後記に村野先生の所感が載っているので引いておく。

「北原氏の一家言は諸君にもよく讀んで貰ひたいと思ふ。これは單に短歌道にとどまる問題ではない。思はぬ教育家、宗教家に共鳴者を出して居ることは見のかすことは出來ない」、

というもの。

同じ後記に白秋選についてこうある。

「今月は小田原へ行き北原先生に同人だけの選をして頂いた。素晴らしい厳選で、數十首の中のやうやく數首を得たやうな人もある。此程の選は一寸他の雑誌にはあるまいと思ふ、何人でも或程度まで行くと兎角安易になり、どうにかなつてゐればよいと思ふ者が多い。これは道の爲め甚だよろしくない」

さて作品欄は巻頭に白秋の「第二桐の花抄」三十九首を置き、次いで村野次郎「夕ほこり」六首が掲載されている。左に引く。

夕ほこり

①冬青（もち）の木にいささかたまる夕ほこりひとり歸りて何かさみしき

②車馬（しゃば）の往き來すでに稀なる道の草ほこりかぶりて夕ぐれにけり

③歸り来て灯のもとにぬぐほこり靴今宵はいたく疲れたるかも

④朝の障子にしづかにうつるもののかげ春のけはひのうごけるらしき

⑤眼をあけて戸の隙（ひま）みれば朝かげのすでにのどけき春となるらし

⑥雨はれて朝かげ親（した）し新芽だつ扇骨（かなめ）木垣根にそひ歩みつつ

「夕ほこり」「ほこり靴」は単語として辞書にはないが、意味は明瞭である。先生には歌集『夕あかり』があるが、これは辞書に登載されている。「ほこり靴」はやや苦しいが、意味は明らかでこの文脈で読んでおこう。

①の歌、「冬青」には「もち」のルビがあるが、広辞苑にはこの読み方では出ていない。同書には「冬青（そよご）」とあり、「モチノキ科の常緑低木。高さ約3メートル。雌雄異株、時に同株。葉は厚く、光沢がある。初夏、葉腋に白色で筒形4弁の小花を開き、紅色・球形の核果を結ぶ（以下略）」とある。

この「冬青」は先生のお宅の入口近くにあったものか。帰宅して最初に目に入ったものが、今日は珍しく「冬青」の葉に溜まっていたほこりであったのだ。やれやれお互いに忙しない一日だったなあ、というほどの疲労と安堵感の窺える歌。

この一首は先生の学生時代のものか、下句の寄辺無さはそんな雰囲気で読んだ。結句はあえて具体を出さず曖昧に気持を放り投げているようだが、これも一つの技法であろう。

②の歌、同時期の一連の中のもの。この時代は未だ車馬が主要な輸送手段だった。

③の歌、『村野次郎三百首』にも採られている先生の後年の秀歌、「帰り来て鞄畳にわが置きつ今日は一日暑き日なりき」（『明宝』）を反射的に思い出した。

殆ど同じ気息で歌われているが、後年の「わが置きつ」には分厚い人生経験を経て来た艶と、悠揚迫らぬ余裕が感じ取れる。

④の歌、淡い春の気配を掬い春を待つ気持が滲んでいる。若い感受性は鋭敏に春の到来を感じ取っているのだ。先生の技法は対象をあからさまに表現するのではなく、「雰囲気」と「暗示」で表現しようとするもの。

⑤の歌、前の作品同様に何か歌い急いでいる感じを与えるのは未だ言葉が先だっているからだろう。

⑥の歌、二句に先生のやや昂揚した、晴れやかな気持が窺える。若さ特有の哀愁のなかに春の到来を感受する一連である。